特集 2022年度

1人ひとりの望む暮らしを目指して～ソーシャルワークの実践～

利用者の「想い・願い」を中心に据えて支援にあたることを、愛泉会では1つのテーマにしています。どんなところでどんな暮らしをしたいか、その想いを具現化するために様々な取り組みを実施しています。想いの実現に向けて一緒に取り組んでいる内容をご紹介します。

エコファームもとさわ

地域課題に対して私たちができること

山形市社会福祉協議会との協働による中間的就労の場の提供の取り組みについて

令和４年度よりチャレンジ就労（中間的就労支援）の協力事業所として受け入れを開始することとなりました。チャレンジ就労は「中高年層のひきこもり」「8050問題」「仕事に就かない(できない)ことによる生活困窮」など、様々な事情がある方々に対して雇用契約等は結ばない形で、就職活動を行うための作業体験を提供している山形市社会福祉協議会独自の取り組みです。

エコファームもとさわでは、薪割り作業や配達など通常作業の他、結束薪製造作業を体験していただきましたが、参加された方々は作業に熱心に取り組まれ、作業後は薪製造に関して質問してくださる方や「最初は不安でしたが、一つできたら楽しくて最後までできました」「やりがいを感じる作業でした」という嬉しい声をかけてくださいました。山形市社協担当者の方からは「エコファームもとさわさんでの活動を経て、週３日の仕事を始めた方や就労にむけた説明会に参加する方がいます。新しいスタートのきっかけになっている姿を見て、私たちも嬉しく思っています。」とのお言葉をいただきました。

今回の取り組みを通して、作業内容に興味を持っていただけた事や、様々な事情がある方達にとって当事業所で体験が、少なからず新たな道を歩み出すきっかけになっていることを知りスタッフ全員嬉しく感じました。今後も当事業所の地域貢献活動の一環として、定期的に就労体験、社会参加の場を提供していきたいと思います。

［エコファームもとさわ　サービス管理責任者　松田 拓也］

障害者支援施設向陽園

地域移行に向けた取り組み

今年度は、向陽園から2名の方が中山にあるグループホームサニーハウスへと地域移行されました。入所施設での取り組みとしては、利用者のニーズを把握することとともに、職員が愛泉会のグループホームや通所できる事業所の特色を知ることから始めました。アセスメントをしっかり行い、どのようにご本人の希望をかなえていくかというところを考え、1人ひとりのニーズを捉え、どのグループホームであれば環境がマッチするのかを考えました。

移行された二人は、宿泊体験を実施しています。体験や経験の機会を提供し、ご自分の意思で暮らしたい場所や、日中通所する事業所を選択することができました。グループホームでの生活は、自分らしく安心した生活が送れていると報告をもらい、嬉しく思っています。

地域で生活するとは、1人ひとりに合わせたオーダーメイドで作り上げていくことです。利用者が自ら選び、安心して自分らしい暮らしを実現するために、今後も、向陽園では地域移行に向けた取り組みを、継続し行っていきます。

［ 障害者支援施設向陽園　副園長　武田 千香子］

愛泉会セミナー

コロナウイルスの影響もあり、オンライン研修会が主流となりました。形式は変わりましたが、今年も事業所内での学習会に力を入れています。

法人内研修（新採研修）について

令和4年度は、入職1年目の職員を対象とし、計5回にわたる新採研修を実施いたしました。今年は2～3カ月に1回の頻度で研修を開催することで、日々の支援を振り返りながら、さらに学びを深めてもらうことができるような研修形態をつくりました。

研修は、講義とグループワークの2部構成で、講義はソーシャルワークの理論を、グループワークでは講義内容を踏まえ職員同士で意見交換をし、さらに学びを深めてもらうような内容で実施しました。研修に参加した職員からは、「学んだことをいかして支援に取り組みたい」「同期と意見交換して、他の事業所の取り組みも知ることができたし、自分も頑張ろうと思った」といった感想が寄せられました。

後期からは2～3年目の職員も加わり研修を実施しました。コロナ禍ということもあり、他事業所の職員と顔を合わせる機会もなかなかありませんでしたが、この研修が職員同士の交流を図る場にもなりました。

この研修をとおしてソーシャルワークの大切さやその理論について学びながら、グループワークも行うことで職員同士の関係構築も図ることが出来たと思います。次年度以降も複数回にわたり研修を実施する予定です。ソーシャルワークの実践に向けて、これからも研修を検討、実施していきたいと思います。

［創造企画部　支援員　塚田 実央］

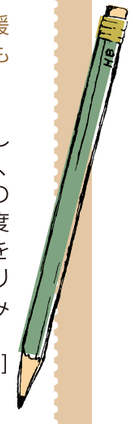
利用者の想いや夢を実現するために

意思決定支援と個別支援計画

令和5年2月10日に当法人内管理職・リーダー職等研修会がありました。コロナ禍で対面による研修会は、数年ぶりになります。講師は、山梨県社会福祉法人三富福祉会、服部敏寛先生より講演をいただきました。長年事業所で取り組んでいる実践をとおしたプロセスをお聞きしました。経験を重ねたからこそわかること、できる支援がある一方でその経験が自分の中でパターンをつくってしまったり、決めつけてしまったり、時には考えを押し付けてしまうことがよくあります。そうならないためにも、利用者の方やご家族のことをよく知り、未来と今だけではなく、過去の歩みに寄り添う大切さがありました。

参加された皆さんからはこんな感想をいただきました。

○アセスメントは、ただ"大切"というのではなく、「過去の物語」「未来図」をみんなで考える大切さをお聞きし、興味深かった
○入所施設より地域移行する時、職員数名も一緒に地域移行するプロセスは、利用者さんも安心すると感じた
○「実現可能な支援は出来る限り対応した」という言葉憧れです
○支えの信条やノーマライゼーションの詩は、職員みんなに伝えたい、共有したい
○よく知っている自分のことを練習に個別支援計画を作成することで、利用者さんの見え方も違ってくるのではないかと感じた　など

個別支援計画が意思決定支援計画として作成しプロセスに基づくサービス提供ができているのか、また、単にプロセスを踏めばあらゆるご本人の意思決定が許容されることではないので一度立ち止まり、多くの支えている人たちで支援を振り返りたいと思います。今後も、法人全体でよりよい支援を目指し、時には立ち止まり、そして進みを繰り返し成長していきたいと思います。

［創造企画部　課長　渡邊 則幸］